

Title	特集にあたって : 学際的研究として挑む「月経」
Author(s)	杉田, 映理; 小泉, 空
Citation	未来共創. 2024, 11, p. 57-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97811
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集にあたって——学際的研究として挑む「月経」

杉田映理

大阪大学大学院人間科学研究科共生学系グローバル共生学講座

小泉空

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター

1. 「月経」の学際性

月経は、女性ホルモンの作用で周期的に子宮内膜が剥がれ、血液とともに体外に経血として排出される生理現象である。しかし、月経は、単に個人の身体に起こる生理現象として異常が見られれば保健医療の対象になることにとどまらず、社会の中に埋め込まれた現象であり、社会的な意味と課題をもつ。たとえば、思春期になって初経（初めての月経）を迎えると、伝統的な社会では結婚が可能な女性になったと見なされたり、経血や月経中の女性がケガれているとする月経観から、月経中の女性の行動に関する禁忌が存在したりしてきた。月経にまつわる研究は、産婦人科系や看護系の保健医療の分野にくわえ、世界各地域の文化を研究してきた文化人類学の分野では長く行われてきた。しかし、それらの分野を越えての研究は、多くなかった。

ところが近年、月経が国際的に社会課題であると認識され、発展途上国でも、欧米でも、日本でも、ムーブメント化している。これは月経への対処の困難さが、女子教育や、女性の社会参加・社会進出、ひいてはジェンダー平等の阻害要因になっていると認識されたことに起因する。そこで、生理用品へのアクセスやトイレ環境の改善、月経教育の拡大、相談できる専門家へのアクセスなどが求められている。また、そもそも月経について語ることがタブー視されてきたことが、月経について考えたり話し合ったりする機会を奪ってきたと言われている。これは政策決定の場においても、教育現場においても、

日々の生活においても、言えることだろう。

こうした月経をめぐる近年の動向をふまえると、これらの課題に関連する研究領域が多分野にまたがることは自明であろう。すなわち、月経は多くの分野からの研究が可能であり、諸課題の理解には多角的な学際研究が必要なのである。特に、日本におけるこれまでの月経研究は、分野も対象も限定的だったと言わざるを得ない。

2. 今回の特集企画の発端から発刊までの経緯

今回の特集企画は、杉田映理による上記のような問題意識からはじまった。これまで、研究においても限られた分野でしか語られてこなかった月経を、多角的なアプローチで語ることは出来ないか。そこで同じ問題意識を共有する本誌編集事務局メンバーとともに、2023年7月に、特集企画「学際研究として挑む「月経」」に向けた研究会を立ち上げた。

さらに遡ると、杉田が2022年度後期に開講した「国際協力学特講：月経、ジェンダー、国際協力」と題する大学院生向けの授業がこの特集の源泉の1つとなっている。講義と演習を組み合わせたこの授業には、実に多くの分野を専攻する学生が集まった。文化人類学、社会環境学、教育文化学、共生学、地域創生論、国際協力学など、これこそが大阪大学人間科学研究科の面白みだと言えるメンバーだった。さらに医学系研究科からも保健学や学校保健を専門する複数名の学生が受講した。社会人経験者や留学生、男子学生もいるダイバーシティに富んだ学生陣で、グループディスカッションの際も活発に議論が交わされた。

この授業の中で、杉田が「お題」を出し、学生が協働でデータ収集をして取り纏めるというグループワークを課した。どの「お題」を選ぶかは学生自身に任せられ、また調査項目や調査方法もグループで話しあって決めた。「お題」は3つ（3グループ）出したが、そのうちの2つが「男子・男性にとっての月経観と知識」と「高齢者の月経の語り」であった。月経研究は、月経が社会的な経験であるにも関わらず研究対象が男性であることが稀であること、また、現在の月経の経験を相対化するためには高齢者の経験から示唆を得られる可能

性が高いことが、お題設定の理由であった。前者について調査したのが、陸口雄斗・三浦遥・西村尋・YUN Yajing・宮本幸乃であり、後者を取り上げたのが、三橋涼子・伊藤美穂・尾崎晶代・倪婷婷である。学生によるインタビューガイドの作成を経て、大阪大学人間科学研究科共生学系の倫理審査承認を得た(OUKS22056)。

これらの調査で各チームが聴き取った内容が、非常に興味深く、月経研究としても貴重な資料になると杉田は感じており、このまま眠らせるのはもったいないと考えていた。そこへ、未来共創センターの本誌編集事務局の木村友美から本誌の2023年度の特集テーマの募集の案内を受けたので、「渡りに船」と企画をした次第である。

未来共創ジャーナルとしての2023年度の特集テーマとして「月経」が採択された後、この研究会は随時新メンバーを広く募集しながら、2023年8月から2024年1月にかけて、計四回実施された。上記の2チームのメンバー以外にも、人間の共生学を研究分野とする池端祐一朗、日本の高校で月経教育の調査を実施した小塩若菜のほか、フェミニズムを研究する学生などが加わった。

研究会の内容の概略は次のとおりである。まず第一回目の研究会では、各メンバーの問題意識を共有しながら、特集原稿執筆者の分担を決めていった。続く第二回目の研究会では、三橋・伊藤・尾崎・倪、陸口・三浦・西村・YUN・宮本の2チームが、ともに先述の国際協力学特講でのインタビュー成果をもとに、前者は高齢女性がつ月経観について、後者は男子学生がつ月経観についての発表を行った。また池端が、カトリックにおける中絶・避妊問題の観点から、カトリックにおける月経の位置づけについて発表を行った。第三回目の研究会では、小塩が大阪の高校生と教師に対する調査をもとに、現在の日本における月経教育の課題について発表を行った。そして第四回目の研究会では、現実的な刊行スケジュールを見据えながら、具体的な特集原稿に向けた課題を、各々確認し合った。

以上、期間としては半年にわたって継続された当研究会であるが、各メンバーの多忙が重なったこともあり、メンバー間での議論の広まりはある程度、制限を受けることとなった。しかし発表者たちの問題意識、また論文化へ向けたヴィジョンが当初から明確だったため、研究会での議論は焦点が合わず

に霧散していくようなこともなく、むしろ各発表者の初発の問題意識を、よりシャープにすることを可能にしたように思われる。

今回掲載される四つの特集論文は、こうして出来上がった四つの尖端とでも受け取ってもらえたら幸いである。これらの尖端は、多様なアプローチが可能な月経研究のほんの一部でしかない。しかし、これまであまり研究されてこなかった日本の高校生男女、大学生男子、高齢者女性の当事者から聞き取りを行い、特に高齢者女性の経験を学際的に検討した研究は、新しい試みと言えるのではないか。また、月経に関する禁忌の源を宗教に求める言説が多い中、カトリック教説を丁寧に検討している本誌の論文も、月経という領域を深く探求することの重要性を示している。以下、より詳しく本特集の構成をみていこう。

3. 本特集の構成

本特集は四つの論文から構成される。

第一論文は、小塩若菜、杉田映理「高校生の月経対処からみる日本の月経教育の課題—大阪の教師と生徒の語りから—」である。本論文は、高校生・教師に対する月経対処、月経教育に関する調査をもとにしたものであり、本論文はそこから、国際的に月経衛生対処が社会課題として重要視されるなか、日本の月経教育の課題を浮かびあがらせようとしている。

本論文はそこで、本特集第二・第三論文の問題意識にも繋がる、二つの課題を明らかにしていく。まず本論文は、学校での月経教育が月経の仕組みは教えてくれるものの、実生活上での月経対処に関するニーズには応えられていないこと（第二論文）を明らかにしていき、またそれが女性のみにも月経の知識が偏る要因の一つとなっていること（第三論文）を明らかにしていく。他方で本論文は、校内での生理用品へのアクセス、休憩・移動のスケジュールリングやトイレ設備といった環境面からも、学校が実生活上の月経に関するニーズに応えられていない現状を示すことで、月経教育を多角的に再検討していく。

第二論文は、陸口雄斗、三浦遥、西村尋、YUN YAJING、宮本幸乃「男子学生における月経との関わりと月経観の形成」である。本論文は、男子学生

がこれまで体験してきた月経にまつわる体験談についての質的調査をもとにしたものである。そして本論文では、月経研究における先行研究蓄積の中で、男性のもつ知識量や理解度ばかりが注視されていることを問題提起し、男性が月経理解を深めるプロセスを明らかにした。特にこれまで語られてこなかった、男性が月経と関わった経験をナラティブに究明しようと試みている。

本論文はこのプロセスを、二つの経路から紐解いていく。まずは学校教育であり、本論文はそこに、月経という身体現象の知識のみが、深く言及されることもなく足早に教えられてしまっている状況を見てとる。もう一つはパートナーのような身近な女性の存在であり、本論文はそこから、月経を抱える女性をどのようにケアすればいいのかわりたいという男性の想い、そしてこの想いに応えられていない学校教育の現状を明らかにしていく。

第三論文は、三橋涼子、伊藤美穂、尾崎晶代、倪婷婷「月経と月経をめぐる経験を通して見る社会—高齢女性の語りから—」である。本論文は、現在高齢者である女性たちがどのような月経を経験してきたか、またそれらの経験を通じて形成された、彼女たちの月経への思い、及びそれに対応した社会認識についての質的調査をもとにしたものである。そして本論文はそこから、人類学・保健学・共生学の観点から、月経という領域を開こうと試みている。

まず人類学の観点からは、それまで月経に付与された「ケガレ」などの観念に焦点を当ててきた先行研究に対し、本論文はそこから抜け落ちる、高齢者が経験してきた具体的な月経への対処法を明らかにしていく。次に保健学の観点からは、現在の公教育における月経教育、性教育から抜け落ちやすい月経や性に関する社会的要因の視点を包括した教育のあり方を提唱していく。第三に共生学の観点からは、月経コントロールを容易にした現在の医療技術の進歩に対し、本稿は技術による月経問題の個人化・不可視化を指摘し、進歩史観からは抜け落ちる高齢者たちの経験に、改めて光をあてていく。

第四論文は、池端祐一郎「カトリックの教説と月経——タブー・中絶・避妊と月経」である。本論文は、西欧フェミニズムが問題化してきた月経のタブー、その背景であるカトリックの教説に焦点をあて、そこでの月経の位置づけを明らかにしようとしている。

本論文はまず、カトリック教説において、中絶・避妊に比して、月経に関

する言及が空白となっていることを指摘する。しかし本論文は、中絶・避妊に関する言説が、間接的に月経という領域に影響を及ぼしている可能性を示唆していく。そしてその上で本論文は、カトリック教説における月経の位置づけを明らかにするため、中絶・避妊に関するカトリックの教説の検討という迂回路を経ていく。そして本論文はカトリック教説が、一方で紆余曲折を経ながらも受胎即入魂の考えに帰着し、また他方で性交時の膈外射精や器具の使用の禁止へと帰着することで、結果的にピルという月経コントロールの手段へのアクセスを禁じていると主張していく。

このように、本特集は、異なる研究分野を背景とする執筆者が集まり、月経という大きなテーマを四本全体で学際的に研究する形となった。今後、月経をめぐる新たな学際研究を開いていくきっかけになることを期待したい。